

2023 AC

The 2nd Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.4 26日(朝)

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

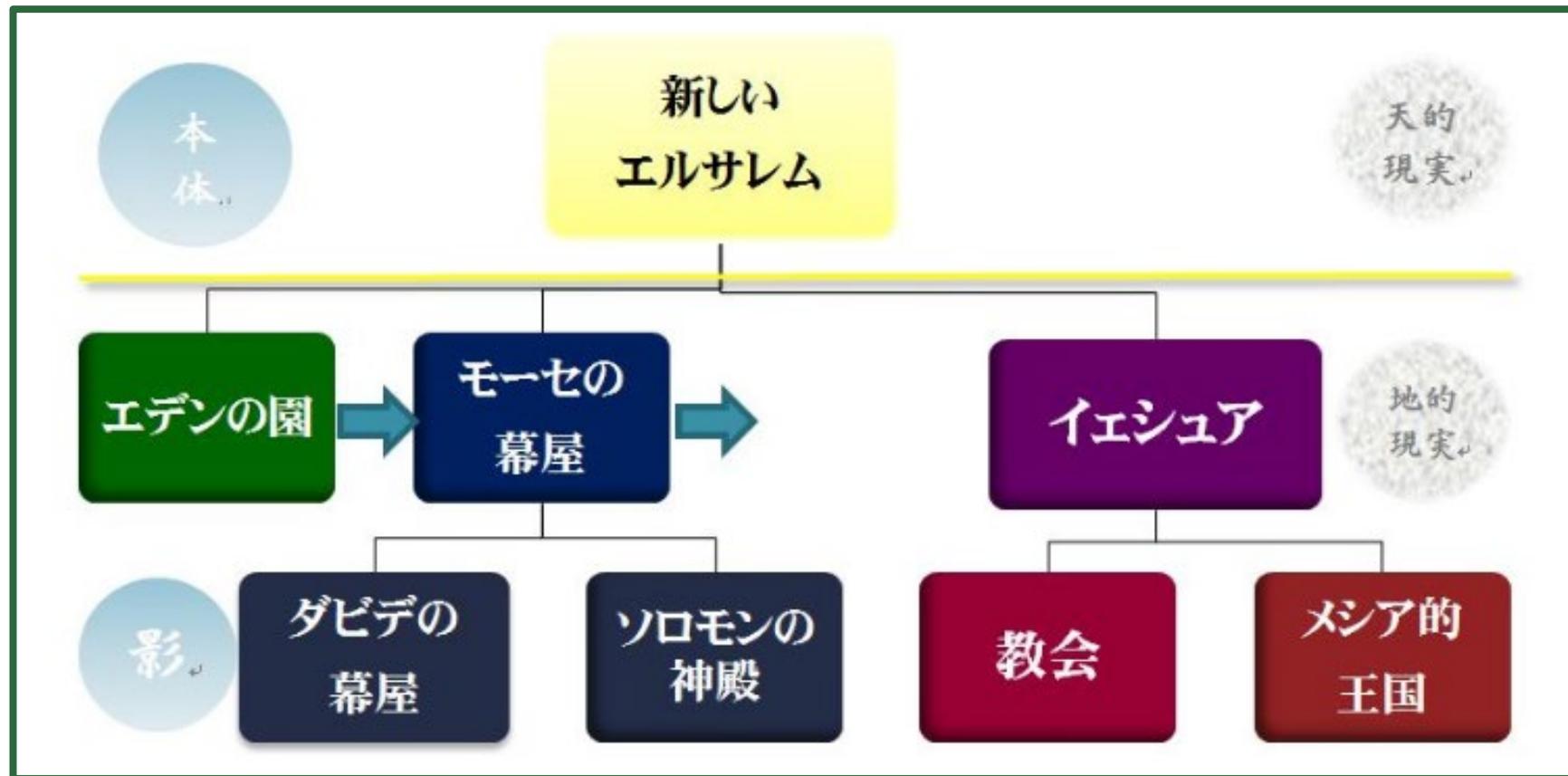
【新改訳2017】
イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、
まだなされていないことを昔から告げ、
『わたしの計画は成就し、
わたしの望むことをすべて成し遂げる』という。

(二重の同意的パラレリズム)

「エデンの園」の本体は「新しいエルサレム」

- それは「天」にあり、しかもすでに完成されているのです。



1. 前回の補填 ①

【新改訳2017】創世記2章8節
神である主は東の方のエデンに園を設け、
そこにご自分が形造った人を置かれた。

●前回、8節で「最も大切な語彙は何か」を尋ねました。答えは、神である主が形造った人をエデンにある園の中に「置かれた」（「スィーム」ロ¹ψ）でした。それと対比させる意味で、3章15節にある期間限定の「置いた」（「シート」カ¹ψ）にも触れました。ところが、2章15節にもう一つの「置いた」（「ヌーアツハ」カ¹）があるのです。「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き」とあります。すでに8節で「置かれた」とあるにもかかわらず、15節では「連れて来て置いた」とあります。一体、これはどういうことでしょうか。

1. 前回の補填 ②

- 15節の「連れて来た」のヘブル語は「ラーカハ」(לָקַח)です。この語彙は、「取る」と同時に「めとる」という結婚用語です。つまり、神が人と結婚してともに住むために、人を連れて来たというニュアンスです。結婚の概念は2章後半の重要なテーマであり、聖書全体における重要なテーマとなっています。
- さらに「置いた」と訳された原語「ヌーアツハ」(נָח)は、「安らかに導かれる、安息を与えて憩わせる」という意味をもっています。このことも、人をエデンの園に置いた神の目的です。これは黙示録21章にある「新しいエルサレム」が夫のために飾られた花嫁のように整えられて、天から降って来るという表現と符合します。まさに、「わたしは後のことを初めから告げ」(イザヤ 46:10)ていることを証ししています。

1. 前回の補填 ③

●ヘブル語「ヌーアツハ」(נָאֲחַ)は、マタイ11章28節の「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」の「**休ませてあげます**」がそうです。「くびきを負う」というフレーズも結婚の概念で、これも黙示録21章と符号します。

【新改訳2017】ヨハネの黙示録21章3～4節

3 私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。

「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。

4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

1. 前回の補填 ④

- 「ヌーアッハ」の名詞「メヌーハー」(מְנוּחָה)は「憩い・安息」を意味します。「主は私の羊飼ひ。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます」(詩篇23篇)の「いこい」、これが「メヌーハー」です。主が私をそこ(憩い、安息)へと伴われるのです。その主との深い親密な交わり、かかわりこそが私たちに安息をもたらすのです。エデンの園はそうした「安息に満ちた場所」(Secret Place)です。神が与える安息を味わい、そのすばらしさを楽しむために人がすることは何かと云えば、「耕すこと」と「守ること」です。これは「王なる祭司としての務め」です。換言するなら「パーニーム・エル・パーニーム」(פָּנִים אֵל פָּנִים)の務めです。つまり「顔と顔を合わせる」ことで、「主を知る」永遠の至福の務めなのです。ですから、この「置く」は永遠に続きます。

2. 今回のテキスト(2章9節) ①

●「顔と顔を合わせる」ことで「主を知る」という永遠の至福の務めのために、エデンにある園がどのようなようであったかが記されているのが、9～15節です。今回はその一つの面です。

【新改訳2017】創世記2章9節

神である主は、その土地に、見るからに好ましく、
食べるのに良いすべての木を、そして、
園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

- ①「見るからに好ましい木」 ②「食べるのに良い木」 ③「いのちの木」
④「善悪の知識の木」

●ここに登場するのは、すべて「木」(「エーツ」 עֵץ)です。これは人が食べるための「木」であり、「木」は「神のことば」のメタファーです。

2. 今回のテキスト(2章9節) ②

ハーアダーマー ミン エローヒーム アドナイ ヴァヤツマハ
מִן הָאֲדָמָה אֱלֹהִים יְהוָה יִצְמַח
その地 から 神である 主は 生えさせた

レマルエ ネフマード エーツ コル
כָּל־עֵץ נְחֻמָּד לְמַרְאֵה
見るのに(外見は) 好ましい 木 すべての

ハツガン ベトーフ ハハツイーム ヴェエーツ レマアハール ヴェトーヴ
וְטוֹב לְמַאֲכַל וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֶּן
その園の 真ん中に いのちの 木 食べるのに 良い

ヴァーラー トーヴ ハツダアット ヴェエーツ
וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע:
と悪の 善 その知識の 木

2. 今回のテキスト(2章9節) ③

●多くの「木」があるように思えますが、根はひとつです。神のことが「エーツ」にたとえられているからです。

☞ 黙示録22章2節の川の両岸にある「いのちの木」は複数形ではなく、単数形です。

ハーアダーマー ミン エローヒーム アドナイ ヴァヤツマハ
וַיַּצְמַח יְהוָה אֱלֹהִים מִן־הָאֲדָמָה
 その大地 から 神である 主は 生えさせた

レマルエ ネフマード エーツ コル
כָּל־עֵץ נְחֻמָּד לְמַרְאֵה
 見るのに(外見は) 好ましい 木 すべての

ハッガン ベトーフ ハハツイーム ヴェエーツ レマアハール ヴェトーヴ
וְטוֹב לְמַאֲכַל וְעֵץ הַחַיִּים בְּתוֹךְ הַגֶּן
 その園の 真ん中に いのちの そして木 食べるのに そして良い

ヴァーラー トーヴ ハッダアット ヴェエーツ
וְעֵץ הַדַּעַת טוֹב וְרָע
 と悪 善 その知識の そして木

●3章6節にも「トーヴ・レマアハール」がありますが、その判断の主体は神である主ではなく、女です。

3. 「生えさせた」(「ツァーマハ」 חַמָּץ)

●冒頭にある「**生えさせた**」は今回で二度目です(初出2:5)。9節の中心となる語彙です。つまり神である主は、エデンの園に人が食べる木を生えさせたのです。

●「生える」の「ツァーマハ」(חַמָּץ)が名詞で使われるとき、「若枝」(「ツエマハ」 חַמָּץ)となり、メシアを表す比喻となります。「木」はイエシュアを表すメタファーです。またイスラエル視点における「木」には、ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木もあれば、雅歌に登場する花婿は「りんごの木」にたとえられています(2:3)。「りんごの木」と訳されたヘブル語「タツプーアツハ」(חַמָּץ)の実は、花嫁にとって「甘い」のです。これらはみな神と神の民イスラエルとのかかわりを、木にたとえているのです。

4. 「見るからに好ましい木」 ①

「見るからに好ましい木」

(「ネフマード・レマルエ」 נֶפֶטְמָאָד לְמַרְאֵה)

- エデンの園に生えたすべての木が「見るからに好ましい」とは、「いかにもおいしそう」という意味で、「ハーマド」(חַמָּד)の分詞「ネフマード」(נֶפֶטְמָאָד)が使われています(他に創3:6)。動詞の「ハーマド」(חַמָּד)は「欲しがる、望む、慕う、喜ぶ」を意味し、名詞の「ヘメッド」(חֶמֶד)は「優美」を意味しますが、主体が誰であるかが重要です。ヘブル語動詞の主体は神にあります。「見るからに」の「見る」は「神の幻(Vision)、神のご計画」を意味しているのです。

4. 「見るからに好ましい木」②

【新改訳2017】箴言29章18節

幻がなければ、民は好き勝手にふるまう。
しかし、みおしえを守る者は幸いである。

- ここでの「幻」は「ハーゾーン」(𐤇𐤁𐤏)です。「見る」を意味する動詞「ラーアー」(𐤋𐤏𐤏)と、「ハーザー」(𐤇𐤁𐤏)は同義です。「幻」とは神のご計画とその完成のすばらしさを意味します。もしそれが見えないとしたら、民は好き勝手にふるまうのです。「幻」は神のみおしえ(「トーラー」𐤋𐤏𐤏)の中に啓示されています。これが「見るからに好ましい木」の真意なのです。

5. 「食べるのに良い木」

● 「食べるのに良い木」 = 「トーヴ・レマアハール」 (טוֹב לֶמַאֲחֹל עֵץ) この表現も「神のことば」と言えます。人は「食べる」ことで、その食べ物と一体となります。食べることによって、神のことばが人の内に「とどまり」、神とともに生きることを意味します。

● 「良い木」の「良い」(「トーヴ」טוֹב)は、創世記1章の神の特愛用語です(4, 10, 12, 18, 21, 25, 31節)。神は良い方であり、良いものしか与えることのできない方です。エデンの園の中で、人は「いのちの息」を吹き込まれただけでなく、「食べるのに良いすべての木」に象徴される「神のみことば」によって生きるものとされたのです。神のご計画の究極の目的は、人が「神のことば」(黙示録19:9)となつて(=造り変えられて)、神と一つになることなのです。

6. 「園の中央にある木」 ①

● 「園の中央に」と訳された「ベトーフ・ハッガーン」(בֵּית־חֶמֶד) は「園のど真ん中に」という意味です。「ベトーフ」(בֵּית)は、「中、間、真ん中」を意味する「ターヴェフ」(תָּוֵף)の連語形「トーフ」(תָּוֵף)に、前置詞の「ベ」(בְּ)が付いた形です。すでに創世記1章6節に登場した語彙ですが、とても重要な語彙です。幕屋においては「至聖所」であり、人においては「霊」の部分です。そこで神と人はかかわるのです。再生されるのもその部分からです。

● ユダヤ教のシナゴークでは、律法(トーラー)の朗読台は会堂中央位置にその座を占めているそうです。それはトーラーの教えこそ最も重要なもので、すべての出席者から等しい距離にあることを示すためだと言われています。

6. 「園の中央にある木」 ②

●出エジプト記 25章8節に「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは彼らのただ中に(ロֹאֲהֶוָה)住む」とあります。

イスラエルの民が宿営する際、真ん中に幕屋の天幕(「オーヘル」וֹהֶל)が設営され、その周囲にはモーセ、およびアロンと三人の息子をはじめとするレビ族が宿営します。さらにその周囲に十二部族が、東にユダの陣営(両脇にイッサカル、ゼブルン)、南にルベンの陣営(両脇にシメオン、ガド)、西にエフライムの陣営(両脇にマナセ、ベニヤミン)、北にダンの陣営(両脇にアシエル、ナフタリ)が配置されます。中央となる広場は、各陣営によって四方から大きく囲まれています。いのちの木が園のど真ん中に位置していたように、天幕を通してイスラエルの神がイスラエルの民のただ中(至聖所)に住まわれたのです。そしてこの至聖所から神のことばが語られたのです。

7. 「いのちの木」①

● 「いのちの木」(「エーツ・ハハツイーム」)という語彙は、聖書に11回(創世記3回、箴言4回、ヨハネの黙示録4回)しか記されていません。ここでは黙示録に記されている「いのちの木」を見てみます。

①【新改訳2017】ヨハネの黙示録 2章7節

耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。
勝利を得る者には、わたしは**いのちの木**から食べることを許す。
それは神のパラダイスにある。』

②【新改訳2017】ヨハネの黙示録 22章2節

都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、
十二の実をならせる**いのちの木**があって、毎月一つの実を結んでいた。
その木の葉は諸国の民を癒やした。

7. 「いのちの木」 ②

③ 【新改訳2017】 ヨハネの黙示録 22章14節

自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らは**いのちの木**の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。

④ 【新改訳2017】 ヨハネの黙示録 22章19節

また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれている**いのちの木**と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。

●ここで質問です。最初の人アダムは、果たしてこの「いのちの木」を食べたでしょうか。

●「いのちの木」とは、メシア・イエシュアが語る「神のことば」を意味します。最後のアダムであるイエシュアは、人にこの「いのちの木」を食べさせるために来られたのです。

8. 「善悪の知識の木」

● 「善悪の知識の木」(「エーツ・ハツダアット・トーヴ・ヴァーラー」
עץ הדעת הטוב והרע)については、2章17節で詳しく扱います。9節では、
神である主が人が食べるのにふさわしい「木」として、すなわち「神のこ
とば」として、「善悪の知識の木」をエデンの園の地に生えさせたという
事実です。この事実を確認しておくことが、2章を理解する上で重要です。
箴言では「神を知る知恵と知識」の大切さを教えています。ただしその知
識は、あくまでも「神のいのち」に支えられている必要があります。

● 「善悪の知識の木」があたかも毒を含んでいるかのように思っている人
がいます。しかしそのようなことは決してありません。「善と悪」は、
「ダンからベエルシェバまで」や「北から南まで」が全体を表すように、
「神の知識の全貌」を意味するメリスマ修辞法です。善と悪の知識だけが
一人歩きをして、人が善悪を判断するようになったことが問題なのです。

今回のまとめ

- 神が園の中に生えさせた「木」について学んで来ました。
「木」は「神のことば」のメタファーであり、神とイスラエルのかわりを表す象徴でもあります。神のみこころは、人が神の生えさせた「木」をすべて食べることで、神と一つになることなのです。

【新改訳2017】申命記8章2～3節

2 あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなただを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。

それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

3 それで主はあなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖たちも知らなかったマナを食べさせてくださった。それは、人はパンだけで生きるのではなく、**人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということ**を、あなたに分からせるためであった。